

メタ認知を促進・育成するふり返りの在り方

令和3年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 教科教育実践高度化コース

田中 慧吾

実践報告書要旨

情報があふれ、知識の更新を余儀なくされる、予測困難となったこれからの社会を生き抜く子どもを育むためには、未知なる課題に対しても粘り強く考え抜く資質・能力を育成することが大切であると言われている。しかし、現実の子どもたちはどうだろうか。算数・数学科の授業では問題解決の過程ではなく結果（答え）にのみ着目する子どもが少なくない。このような子どもは、一度経験したことがあるような問題に対しては自分の力で解こうとする姿が見られるが、経験したことがない問題や問題の難易度が少し上がると、問題にじっくりと向き合おうとせずに解決を諦めてしまうことが多いように感じる。解が存在する算数・数学の問題でさえ解決を投げ出すような状態ならば、ましてや未知なる課題に対して対処できるはずもないだろうと危機感すら感じている。このような子どもの姿の要因はどこにあるのだろうか。そして、授業ではどのような工夫改善が必要なのだろうか。

このような子どもの問題の所在は、自身の学びについての認識が足りないことであると考えられる。本研究では、あらゆる課題に対して粘り強く考え抜く子どもを育てるために、まずは、生徒が授業を通して自身の学びの変容を自覚できるようになってほしいと願う。そこで「メタ認知」に注目し、学習の遂行段階ではたらかせるオンライン・メタ認知、事後段階ではたらかせるオフライン・メタ認知のそれぞれを促進するために、授業における工夫を示す。具体的には、実態調査として生徒の振り返りの記述を分析し、振り返りによって学びの変容を自覚できたかについて考察する。その後、オンライン・メタ認知とオフライン・メタ認知の関係性ととも、振り返り活動の在り方を開発する。

本報告書は、3章から成る。第1章では、振り返りに注目するに至った経緯と合わせて学習指導要領を中心に提唱されていることと学習の振り返りの関係について考察を行った。そして、その考察を踏まえて、生徒の振り返りの記述を分析し、その問題の所在を探った。

第2章では、三宮（2018）や深谷（2016）の先行研究を用いて、メタ認知的活動を支えるモニタリングやコントロールについて示している。その先行研究を踏まえて、「問題解決の過程を振り返る」こととは、どのような営みなのかについて考察を行った。その結果、成績が高い学習者ほど、問題解決の過程でモニタリングやコントロールを繰り返しはたらかせ、事後段階のオフライン・メタ認知である振り返り活動によって、何が身に付いたのか（資質・能力）を自覚していくことを確認できた。

第3章では、メタ認知的活動を促進するために授業中で行う工夫について示し、実践研究の考察を行った。その中で、学力下位層の生徒の中に、メタ認知的活動によって自身の学びの変容について自覚する姿を見出すことができた。また、メタ認知的活動を起こすきっかけとして、教師の発問や生徒の発言、特に自分とは違う新たな考えに触れることの重要性も確認できた。

おわりに、一連の研究を通して見出した今後の課題について示すとともに、「主体的に学習に取り組む態度」の育成とメタ認知の関係について、私の見解を述べる。

《キーワード》メタ認知、学びの変容、振り返り